

第1回

青葉区 明るい選挙推進  
作文コンクール



入賞作品集

## えら坊

青葉区明るい選挙推進作文コンクールって、どんなコンクールなの？



次世代の有権者である中学生とその保護者に、選挙や社会について関心を持ってもらうとともに、選挙に対する区民の意識を高めることを目的として、今年度初めて開催したんだ。

へえ、今年初めて開催されたんだね。応募作品はいくつだったの？



216 作品！応募してくれた中学生の皆さん、本当にどうもありがとう！

216 作品！それは、スゴイ！入賞作品はいくつあるの？読んでみたいな！



区内中学校教諭、青葉区明るい選挙推進協議会会長、青葉区選挙管理委員会委員長、青葉区長により厳正に審査されて、青葉区明るい選挙推進協議会会長賞 1 名、青葉区選挙管理委員会委員長賞 1 名、青葉区長賞 1 名、佳作 えら坊賞 10 名の計 13 名が入賞したんだ。



この入賞作品集に全 13 作品が掲載されていて、どれも素晴らしい作品だよ。ぜひ読んでもらって、「選挙」への関心を高めて欲しいな！

えら坊、教えてくれてありがとう！さっそく読んでみるよ(\*^^)v



横浜市青葉区  
選挙のマスコット

## えら坊

「えら坊」は、平成9年12月25日生まれの青葉区の選挙マスコットキャラクター！区民の皆様からご応募いただいた519点のデザインの中から選ばれました。

青葉区民まつりなど各種イベントで、不正のない明るい選挙の推進や投票率の向上の呼びかけを行っています。

### ☆明るい選挙推進協議会とは

- ① 不正のないきれいな選挙(寄附の禁止)
- ② 投票総参加の推進を大きな柱として活動をしている団体で、全国の都道府県・市区町村に設置されています。

### ☆青葉区明るい選挙推進協議会とは

自治会・町内会等から推薦された推進委員 14 名と推進員 114 名により構成され、選挙時の街頭啓発などの活動を行っています。





青葉区明るい選挙推進協議会 会長賞	—				
横浜市の青葉区の投票率を上げるために		市ケ尾中学校	二年	渡辺 悠希	1
青葉区選挙管理委員会 委員長賞	—				
投票率について		谷本中学校	一年	松井 優里	2
青葉区長賞	—				
「何でも良い」と言わない		市ケ尾中学校	三年	丹野 清凜	3
佳作 えら坊賞	—				
選挙について考える		あざみ野中学校	二年	岩崎 唯奈	4
明るい未来へのための選挙		市ケ尾中学校	一年	上野 瑞季	5
たった「一票」が一番大きくなる		山内中学校	三年	小野寺 美友	6
よりよい選挙の実現に向けて		山内中学校	三年	亀井 希葵	7
選挙権のない私たちにできること。		山内中学校	三年	川田 凜	8
外国と日本の選挙の違い		山内中学校	三年	木村 蓮	9
お金のかからない選挙ってむずかしいかな		山内中学校	二年	坪山 準	10
四年後に「選挙権」を持つ未来		あざみ野中学校	二年	鶴岡 友梨	11
投票する重要性		山内中学校	三年	中嶋 彩花	12
選挙への関心		山内中学校	三年	築瀬 賢	13

横浜市の青葉区の投票率を上げるために

市ヶ尾中学校 二年 渡辺 悠希

投票率、これは横浜、日本が抱えている一つの課題だと思う。ちなみに、昨年、平成二十八年参院選の横浜市の投票率は、五十六・三三パーセント、青葉区は五十八・九九パーセントとどちらもあまり高い投票率だとは僕は思えない。では、どうすれば横浜市、青葉区の投票率を上げることができるだろうか。僕は二つの投票率を上げるアイデアを考えた。

一つ目は、若者の投票率を上げるために、投票に参加するとポイントがたまり、たまったポイントで、横浜市内のお店などで使える商品券などが当たる抽選に応募できるシステムを導入すればいいと思う。そうすれば、投票率が上がるだけではなく、横浜市の活性化にもつながり、投票も横浜も盛り上がるのでいいと思う。また、子どもと投票所に行くとポイントが二倍になる、など未来の横浜を背負う僕たちにも選挙について考える機会を多く作ることで、今の投票率だけではなく未来の横浜の投票率を上げることができ、より未来に希望が持てる横浜を作ることが出来ると思う。

二つ目は、高齢者の投票率を上げるためのアイデアだ。高齢者（ここでは、七十歳以上の方を対象とする。）の投票率は、一見高いと思うが実際は市全体の投票率とあまり変わらない。この原因として考えられることは、投票所に行くのが大変ということだ。日本は高齢社会なので高齢者の投票はとて大きなものとなるため、より多くの高齢者の投票が必要である。しかし、行きたいけど行けないという方が多くいる。そこで、僕はこんなアイデアを考えた。老人ホームに投票所を設置する。また希望者には自宅訪問で選挙をしてもらうというアイデアだ。大変で困難なことかもしれないが様々な経験をしている高齢者の投票率は横浜をよりよいものにしていくための大切な一票だと思うので努力を惜しまず高齢者の投票率を上げる対策を多くするべきだと思う。

投票率を上げることは困難なことだと思う。しかし、横浜全体で投票率を上げるため横浜市民一人一人が選挙に触れる機会を増やし、横浜の未来がより明るくすばらしいものになるようにしていけるよう市全体で課題を克服できるように様々な意見を取り入れ、それを実施して投票率を上げることができれば僕は良いと思う。また僕自身もこの作文を書くにあたって選挙について少し知ることができたと思う。これを自己満足で終わらせるのではなく、誰かに伝えていくなど今、僕にできる最大限のことをし、横浜市の青葉区の投票率を上げることに少しでも貢献できるようにしたい。

〈講評〉

筆者は、「投票率の向上」に焦点を当てて、「どうすれば改善されるか」を二つのアイデアから述べています。一つはポイント制の取り入れ。もう一つは、高齢者を対象にした投票所の設置。どちらも、中学生らしい積極的な選挙への姿勢が紙面から伝わってきます。この作文が有権者の皆さんの目に留まり、投票への意識向上に役立てば嬉しく思います。

## 投票率について

谷本中学校 一年 松井 優里

私は横浜市に住んでいる。先日、横浜市長選挙が行われた。私は中学一年生なので、選挙権がない。だから、これまで選挙に興味を持ったことがなかった。しかし、この間たまたま通りかかった選挙カーから、「中学校の給食を実現します！」という声が聞こえてきて、自分に関係のある話をしていると思うって少し興味がでてきた。それから、横浜市長選挙のニュースなどテレビや新聞で、できるだけ見るようにした。

私が選挙の様子を見てきて、一番驚いたことは、投票率の低さだ。なんと、約三十七%なのである。横浜市長という、横浜市を代表する人を決めるための選挙で選挙権を持っている人の半分も投票していないということだ。これは非常事態なんではないかなと思ったら、それでも前回の市長選挙の時よりも投票率は良かったらしい。また、今回の選挙では、林文子氏が再選された。新聞には「圧勝」と書かれていた。ちなみに林氏の得票率は約五十三%だ。つまり、投票した人の半分以上が林氏に投票したということになる。

数字ばかりでは分かりにくいので、身近なところで考えてみることにした。私のクラスは三十六人だ。三十六人のうち、約三十七%が投票した。そのうち当選した人に投票したのは約五十三%だとすると、クラスの人数三十六人のうち、当選した人に投票したのは約七人ということになる。三十六人のうちの七人。それが「圧勝」といわれると、ものすごく違和感がある。七人の意志がクラス全体の意志とされてしまうのかと思うとモヤモヤする。でも、今回の横浜市長選挙って、そういうことなんじゃないか。それでいいのかなあと感じた。

やっぱり、投票率があまりにも低いのは、問題だと思う。もちろん、法律できちんと決められたように選挙をしているのだから、表面上は問題ないということなのだろう。でも、私の感覚からすると、半分以上の人が投票していない選挙で決まったことなんて無効だ。意味がないのではないかと思う。いろいろな事情がある人もいるだろうし、百%は無理としても、八十%くらいの人が投票する社会になってほしい。多くの人が、政治に関心を持って自分の意志を反映させるようになるべきだ。よく、選挙に行かない理由の一つに、「自分が投票しても何も変わらない」という人がいるけれども、まず参加しないとそれこそ何も変わらないのだ。自分の住む街や県や国に関心を持って考えて参加する社会にしていく必要があるのではないか。

## 〈講評〉

市長選を例にとり、投票率と当選者の得票数を自分のクラスに当てはめて考えています。すると、圧勝と報道されていた得票数の実態がみえてきて、驚き、不思議に思う。「半数以上の人が投票していない選挙で決まったこと」なんて意味があるのだろうか？と問いかけ、「まず参加しないと何も変わらないのだ」と訴えます。中学1年生の筆者の言葉は大変説得力があり、読む人の心に響きます。読んだ人の行動さえ変える力のある素晴らしい文章です。

「何でも良い」と言わない

市ヶ尾中学校 三年 丹野 清凜

「今日の夕飯、カレーと肉じゃが、どっちがいい？」

私の母はときどき、家族に夕食の献立は何が良いかを聞く。そして、希望が多かった献立がその日の夕飯となる。要するに、多数決だ。私には弟がいるのだが、私が「何でも良い。」と言うと、「それはダメ。一つ決めて。」と言う。最近、弟のこの発言は大切なことだと気付いた。何でも良いと言っていたら、私が食べたいものはずっと作らないかもしれない。弟の好物ばかりになるかもしれない。もしそうなったとしても、私には文句を言う権利はない。なぜなら私は「何でも良い。」と言ったからだ。

自分の意見を持ち、それを誰かに伝えることは、日常生活の多くで必要だ。夕食の献立や学校、部活動でのルール決めなど、複数の人で一つのことを決めることは多くある。話し合いでも多数決でも、参加しない人は必ずいる。そういう人に限って、あとから文句を言いだす。自分の意見があるのなら、決めるときに参加してほしいと思う。

中学生が決定に参加できる物事といえば、最大で学校単位くらいだ。それが十八歳になれば、選挙権が与えられて、市や日本の物事の決定に参加できるようになる。去年の参院選で青葉区の十代の投票率は、六十三パーセントと横浜市で一番だった。これで満足してはいけないと思う。あと三十七パーセントの人たちは投票していない。そして他の地域では投票率はもつと低い。若い世代の人数は少ないから、より投票率を高くしなければならぬ。そうでないと、私たち若い世代の意見は通らない。若い人が、政治なんて「何でも良い」と思っていると見られてしまう。若い世代の人たちは、全員が今の社会に満足しているのだろうか。改善してほしいことがあっても伝えなければ何も変わらない。まして市、県、国単位のことならば大人数で訴えなければならぬ。そこで一番使える方法が選挙だと思う。若い人の投票率が上がれば若い人は「何でも良い」人ではなくなるはずだ。そうすれば、若い世代の意見も重視される社会になると思う。

中学生の私には選挙権はまだない。そして私は社会について何も知らない。あと三年で選挙権を持つことになるが、そのときまでにしておきたいことが二つある。一つは社会について知り意見を持つこと。もう一つは自分の意見を伝える自信を持つことだ。そのために、あと三年間、授業やニュースで社会を知り自分の意見を持つ。また、家でも学校でも何かを決めるときは意見を伝える。今から選挙の準備をしても早すぎではないと思う。なぜなら、選挙に行かないなんてことはしたくないからだ。

「これからの日本、どんな国にしたい？」と聞かれて、「何でも良い」とは絶対に言いたくない。

#### 〈講評〉

まず、印象的な題名と冒頭の台詞に魅かれました。見事な導入です。そして、筆者は、家庭や学校における日常的な出来事や昨年の参院選における十代の投票率を通して、「何でも良い」という風潮が孕む危険性に警鐘を鳴らしています。「何でも良い」ではなく、「〇〇が良い」と自分の意見をきちんと持ち、それを周囲に伝えることは、若い世代だけでなく、あらゆる世代にとって重要であると改めて気づかせてくれました。

## 選挙について考える

あざみ野中学校 二年 岩崎 唯奈

私は、選挙についてあまり考えたことがありませんでした。去年の六月に、いままで二〇歳からだった選挙権が十八歳からになりました。私はあまり、自覚がありません。なぜ、選挙権が二十歳からではなく、十八歳からになったのかなと思います、メリットとデメリットを調べてみました。メリットは、若い人の意見を聞けることだそうです。それは、これからの社会を作るために、とても大切なことだと思えます。また、新しい考え方が生まれると思えます。そのようなことがメリットです。一方で、デメリットは、日本は政治的関心が薄いので、選挙権を手に入れたからといって、「政治について関心がないので、とりあえず有名な人に票を入れてしまおう」という人も少なくないと思えます。それが、デメリットです。次に、日本の選挙の問題点について考えていきたいと思えます。私は、二つ考えました。一つ目は投票率が低いことです。特に国政選挙は五十%台にまで落ち込んでいるようです。ちなみに、去年の神奈川県選挙の集計によると、参院選神奈川県選挙区の投票率は五十五・四六%だそうです。二つ目は、一票の格差があるということです。それは地域によって、一票の重みが変わってしまうということです。例えば、A選挙区では有権者が百人いて、B選挙区には二十人の人がいるとします。どちらの選挙区にも一人の議員が選ばれるとすると、A選挙区は百人に対して一人の議員、B選挙区は二十人に対して一人の議員が選出されます。つまり、B選挙区の一票はA選挙区の五倍の重みを持つことになります。これが、「一票の格差」なんだそうです。一票の格差の解決策を調べてみました。衆議院、参議院はこれまで一票の格差を是正することに取り組んできたのですが、選挙制度改革とも関連していて、必ずしも容易ではないそうです。人口が多い選挙区の選出定数を増加させたり、区割りを変更したりするなどの抜本的な対策を行うべきと再三言われているけれど、十分な調整がなされていないと指摘されているようです。衆議院は選挙区画定審議会を設置して、格差が二倍以上にならないことを目標としています。これは達成されています。格差を解消するために過去、議員定数について、八十六年「八増七減」、九十二年「九増十減」、〇二年「五増五減」の是正が実施されました。

私は選挙について少し、関心を持つことができました。選挙のデメリットや、問題点を改善する方法は次の世代、私たちが見つけていくべきだと思います。私はこれから、たくさん勉強して、しっかりと考えて選挙に参加したいです。また、これからの社会に少しでも貢献できる人になりたいと思えます。

## 〈講評〉

選挙権が十八歳からになった理由に素朴な興味を持ち、メリットとデメリットに分けて調べた結果をわかりやすく説明できていました。日本の選挙の問題点についても、投票率の低さと一票の格差の二つに注目し、詳しく数値をあげながら説得力を持って伝えられています。まだ、具体的な改善点はあげられていませんが、それを次世代の自分達の使命と捉えて、社会への貢献を決意している点が好ましく思えました。

明るい未来へのための選挙

市ヶ尾中学校 一年 上野 瑞季

去年、私は新聞スクラップというものをやりました。そのときに、青葉区の一投票所で十八歳の有権者八十三人のうち、六十一人が投票し、七三・四九%だったという記事を見つけ、切り取り、ノートに一八歳の関心が高い、ということを書きました。そして今になり、この作文コンクールを見つけ書きたいと思いました。

一八歳の投票率が高かったことは同じ青葉区に住んでいる私としては、とてもうれしいことでした。また、同じ投票所の一九歳の投票率は一八歳より低い、五〇・六七%でした。これからもさまざまな選挙がありますが、ずっと高い投票率でいるのでしょうか。ずっと高い投票率が続いてほしいです。

一八・一九歳以外の投票率は低いようです。有権者がとてもいるのに、投票しないのは、もったいないと思います。行きたくても行けない、という人もいるはずです。このような選挙に行けない人は、期日前投票制度や不在者投票制度、在外選挙制度などさまざまな制度があるので、これらの制度を使って、できるだけ多くの人に選挙に関心をもってもらい、投票率を高めていってほしいです。今までの選挙でも、投票にみんなが行っていれば結果が変わっていたことも多くあると思います。また、投票を適当にやるのではなくしっかりと自分の頭で考えてから投票してほしいです。

七月三十日には、横浜市長選挙がありました。次の日の朝、私はその投票率のっているのが新聞を見るのが楽しみでした。すると横浜市 of 投票率は三七・一九%。私はとてもおどろきました。もつと高いと思っていたからです。とても残念でした。一三年の八月に行われた前回は二九・〇五%と過去最低で、前回よりも今回は8ポイント上がったそうです。8ポイント上がったのは良いことですが、やっぱり、今回も前回も低すぎます。なぜ投票率が上がったのか気になる私は、記事を読み進めていくと、今回は投票日を約一か月繰り上げたり、若い人のために人気のお笑い芸人を起用したりしたそうです。このようにさまざまな工夫をすることで投票率を上げることができたので、これからも頑張っしてほしいです。

私は選挙に興味をもつことができました。私が十八歳になったとき、投票率はどうなっているのでしょうか。私は十八歳になって投票に行きたいです。十八歳だけでなく、さまざまな年齢の人がたくさんくるといいなと思います。そしてみんなが選挙に関心をもってほしい、そんな未来になるのが楽しみです。

## 〈講評〉

新聞スクラップをやっていたためでしょうか、細かいデータに基づいて話を進めているので、信頼感のある印象を受ける作品でした。また、内容も投票率に視点を絞って、地域のことや投票行動について考えているのでわかりやすい文章でした。なぜ関心が低いのだろうか、関心があっても投票に行けない人はいるのだろうか、などと立場を変えてみると将来に向けての具体的な意見を提案することができるともしれませんね。



たった「一票」が一番大きくなる

山内中学校 三年 小野寺 美友

昨年の参議院議員通常選挙から適用された選挙権年齢の引き下げ。私は、二十歳から十八歳へ引き下げられた選挙資格についてとても疑問に思ったことがあったため、今回、この作文を書く機会に考えてみようと思った。

これまでの政治に関する歴史を調べてみると、「選挙」という制度ができる前は、政治を行う武士や貴族、政府などの当事者のための政治だった。これだったら、一般的な国民の立場にある私は、不満に思っただけで選挙権を獲得したいと思うだろう。実際に、国会を開くように主張する「自由民権運動」により、帝国議会を開くことになったが、選挙資格をもっている人はたったの数パーセントだ。そこから、より幅広い人たちが政治に参加できるよう、選挙資格が引き下げられるよう、人々の努力もあって、戦後に、二十歳以上の男女という平等な選挙資格になった。平等を求めるのなら、ここまででも十分なはずである。だが、なぜ選挙権年齢が引き下げられたのか、私は疑問に思った。

インターネットを利用して、選挙権年齢が十八歳に引き下げられた理由を調べてみると、「若者の声を政治に反映させるため」と書かれていた。しかし、実際に政治に関心のある若者はわずかであると思う。関心がある人にとってはよくても、あまり関心のない人にとってはあまり意味がないことには思える。つまり、この目的のために十八歳に引き下げられても、大した変化は起こらないのではないかと思う。では、どうしたら選挙権年齢を引き下げられた目的を達成することができるのか。あたり前だと思いが、私は、一人一人が政治や選挙に対して関心を持つのが一番だと思う。関心がなかった私も、この機会に政治についていろいろと調べてみて、政治や選挙が意外と近くにあることを知ることができたので、少しは関心が高まったと思う。だが、これで関心を持つ人が増えて、投票してみようと思っても、たった「一票」の自分の票でどうにかなるわけがない、と思ってしまうかもしれない。確かに、自分の「一票」はとても小さいもので、これだけではどうにもならない。しかし、これが十人、百人、千人と投票する人が増えていくことにより、「一票」はとても大きくなることができる。つまり、少しでも多くの若者が、少しでも関心を持てば、自然とその分若者の声を政治に反映させることができるのだ。

私が選挙権を得られる年齢まで、あと約三年だ。政治は他人事、と思うのではなく、せつかく選挙資格が十八歳になったのだから、自分にも関係しているんだという意識を持ち、たった「一票」を投票できる人でありたい。

#### 〈講評〉

選挙権年齢が引き下げられたことを契機にして、筆者は調べた政治に関する歴史をまとめ、そして、「どうしたら選挙権年齢を引き下げられた目的を達成することができるか」に触れています。政治や選挙が、意外と近くにあることを知ることができた——この作品は、有権者に一票を行使することの大切さをしっかりと訴えています。

よりよい選挙の実現に向けて

山内中学校 三年 亀井 希葵

公職選挙法が七十年振りに改正され、十八歳以上の全ての男女に選挙資格が引き下げられました。つまり、現在十五歳の私は、三年後には選挙で投票できるようになります。選挙の当事者として、よりよい選挙、投票にするために、何ができるか、何が必要かを考えてみました。選挙の現状を調査するため、青葉区の統計要覧「なるほどおぼくデータで見る青葉区」を読みました。そこには、各種選挙別投票率、平成二十八年七月十日執行参議院議員通常選挙（選挙区）に関する区別投票率と青葉区投票所別投票率について書いてありました。

青葉区の投票率は、国政選挙の方が高い傾向にあること、青葉区の投票率は今回新たに選挙資格を得た十八・十九歳で、横浜市十八区中一位であることが紹介されていました。また、青葉区の投票所四十二か所のうち、私の家族が投票する美しが丘西地区センターは投票率三位と高い位置にあることを知り、うれしく思いました。私たちが選挙資格を得るころには、自分の投票だけでなく、横浜市の中で青葉区を、青葉区の中で美しが丘西地区センターの投票率が上位になるように貢献したいです。

では、どうしたら、国政選挙だけでなく市長選挙や統一地方選挙に、青葉区民が関心を持つて投票するようになるでしょうか。

私は横浜市長や市議員について、二つの事を理解することが重要だと思います。一つ目は、市長や市議員は、国会議員よりも身近な私たちの代表者ということです。地元に着した内容を議題にあげて話し合うため、私たちの生活に直接的で大きな影響力があります。そのことを再認識する必要があります。二つ目は、私たちは総理大臣を直接選べませんが、市長は選挙で投票し選べることができます。その機会を自ら放棄するのはもったいないです。

その他にも、自治体と区民が協力して、多様な取り組みをすることで投票率の向上ができると思います。

私のアイデアは、選挙権を得る中学生や高校生に、選挙の流れを理解し体験する授業を実施することです。また、自分たちが住む地域にある課題は何かを考え、お年寄り世代、家庭内外で働く世代、学生世代など、各世代、立場でどのような解決策が望ましいのかを区民で考える機会を持ち、その考えに対して、候補者はどのように考えるか説明してもらおう機会を設け、自分の考えに近い議員に投票できるように情報を提供するのはどうでしょうか。また、選挙のあり方を見直すことも検討したいです。今回の選挙では、有名芸能人が自身のギャグを用いて、「選挙だぞ」と呼びかける広告活動が行われました。市民の印象に残り効果的なので継続してもらいたいです。更にインターネット投票など、投票しやすい環境の整備も今後は重要になると考えられます。

#### 〈講評〉

自分の住む地域の投票率を調べ、その結果を受けて自分の住む地域に誇りが持てるのはとても素敵です。しかも現状に満足せず、もっと高い投票率になるように具体的なアイデアをたくさん考えているところが素晴らしいです。中学校への選挙についての出前授業や世代を超えての話し合いの場作り、立候補者の具体的な意見を聞ける機会作りなど、本当に実現できたらいいですね。

選挙権のない私たちにできること。

山内中学校 三年 川田 凜

私は現在十五歳です。選挙制度が今のまま改正されなければ、私はあと三年で選挙権をもつこととなります。私が選挙権を得たら、必ず投票へ行くと決めています。それは、選挙に私たち国民が参加する意味を知っているからです。

しかし、視野を広げて見ると、選挙の投票率は低く、昔に比べて減少傾向にあります。私は中学校の歴史で、選挙権の移り変わりを学びました。教科書などに載っている写真を見ると、昔は政治に参加したいという人が多くいたことがわかります。

私は昔、両親が投票をするのについて行ったことがあります。その時、一番印象に残ったのは、投票所に人が全然いなかったことです。私は、もつと人がたくさん来ていて、国民の政治参加への意識が高いのだと思っていました。

では、なぜ国民の政治に対する意識が低いのでしょうか。私なりに理由を考えてみました。一つ目は、そもそも選挙を知らない、ということ です。以前、私の町のお祭りに参加したとき、アナウンスで「今日は〇〇選挙です。みなさんもぜひ投票に足を運んでください。」と流れました。すると私の周りにいた大人の人们たちが、「そうだったっけ：？」、「へえ、そうなんだ。」と言っていました。その選挙があることを知らず、他人事のように話していたのを覚えています。選挙に関する情報を知らないということが、一つの問題点だと考えました。

そしてもう一つは、一人分の力に意味を感じていないことです。「自分が投票してもしなくても変わらない。」「自分一人の力だけでは意味がない。」と考えている人が多いのではないのでしょうか。「塵も積もれば山となる」ということわざがありますが、私たち一人一人の投票が集まれば、それはやがて大きな力となり、国を動かしていくと私は思います。

中学三年生となり、歴史や公民などで選挙を学び、選挙に参加することが国民にとってどんな意味があるのかを知りました。また、自ら投票する事はできませんが、私たちにはできることがあると思います。それは伝えることです。選挙の大切さを知っている私たちだからこそ、身近にいる大人に選挙へ参加する意味を伝えることが私たちにできることだと思います。私たちの小さな声で、少しでも意識が変わって、政治への関心が高まればいいと思います。伝えることが、投票率の増加につながる一歩だと思えます。

#### 〈講評〉

筆者は中学校の社会科の授業で、近代日本の普選運動から戦後ついにすべての成人男女による完全普通選挙が実施されるまでの歴史を学び、現代の投票率の低さについて考えます。かつての日本人がこんなに苦勞して手に入れた選挙権なのに、どうして？と。そして歴史を学んだ自分たちこそが「身近にいる大人に選挙へ参加する意味を伝えることができる」と。大人たちがすっかり忘れていた投票する「権利」について思い起こさせてくれます。

## 外国と日本の選挙の違い

山内中学校 三年 木村 蓮

僕は選挙にとっても興味があつて投票したいが、現在日本は十八歳以上の男女しか投票できずとても悔しい。まだ知識が浅かったり、ふざけて投票してしまう可能性があるが、海外でも日本と同じような年齢制限が行われているのだろうか。

例えばアメリカの選挙権は十八歳からで日本と同じだが、自分が支持する人の顔写真が描かれたバッチを胸につけ、応援のメッセージを書いたTシャツや帽子をかぶり、音楽に合わせて踊っている。候補者が会場に姿を現すと、大歓声で出迎える。日本では一般の方達がこのようにするのは、あまり見たことがなく、とても政治に積極的だ。

アメリカと日本の選挙の大きな違いは、選挙権を自動的に持てるか自分で獲得するかだそう。日本は十八歳になれば自動的に選挙権が与えられるが、アメリカは、選挙の前に登録をしなければ選挙権が与えられない。権利は自分で獲得するものという考え方はとても生命力にあふれる考えだと思つた。権利は自分で獲得するものと思えば、自分の生活を守る権利も獲得できると思う。権利を使って住みやすい社会にするには、政治家や政党の考え方を知ることが大切だと思う。僕の学校では生徒会を決める時に、本番さながらに投票していて、具体的なやり方がよく分かつた。授業でももつと学んで、もつと選挙に対する考えが変わつて欲しいと思う。しかし、内閣府調査によると、日本の若者は関心があると答えた人が五十・一%で、どちらかといえば関心があると答えた人が四十・六%で外国と比べると低い関心度となっている。

十八歳以上の男女が選挙権を得る前は、選挙に行きたくても行くことができなかつたのに、選挙に行かないのはとてももつたいたいと思う。何か言わないと、相手には伝わらないから、日常生活においても、自分の意見を発言することは大切だと思う。これから、もつと発言していく人が増えてきてほしいと思う。

発言するのは恥ずかしかったり、周りのことを考えて言えないことがあるかもしれないが、頑張つて発言していつてほしいと思う。自分も、よく言えないことがあるが、何事も練習してできるようになりたい。これから、いろいろなことを学んで、蓄積し、考えをもつと深めていきたい。考えや知識を深めることで、誤解や間違いを減らしたい。もつといろいろな人と意見を交換して、十八歳の時に、正しい知識で、自分の考えで、投票したいです。しかし、自分が投票する前に、選挙の年齢制限が下がってくれるとうれしいです。

## 〈講評〉

筆者はアメリカと日本との選挙の違いをわかりやすく述べています。日本は十八歳になれば自動的に選挙権が与えられるが、アメリカでは登録しなければ選挙権は与えられません。とかく無関心になり過ぎる若者の選挙意識。筆者はこれでいいのかと問いかけています。投票率が低迷する現在。考えさせられることを鋭く突いた作文だと感じました。

お金のかからない選挙ってむずかしいかな

山内中学校 二年 坪山 準

選挙って何かな。まず、それを考えてみた。僕達の学校でも生徒会があり、選挙をして生徒会役員を選ぶ。国会には国会議員がいるし、神奈川県には県議会議員がいる。今、町中には、横浜市長選挙のポスターが、たくさん貼られている。みんなの代表を選ぶのが、選挙だ。どうして代表をそんなにたくさん選ばなければならないのだろう。横浜市会議員の数は、八十六人だという。任期は四年で定例会は年四回。ここで僕達の町の大事な事を決め実行していく訳だ。議員の数ってそんなにたくさんいるのか？って事から、話し合った方がいいのではないかな？その議員さんの給料分、すなわち税金を別に使えないかな？

僕はまだ中学生だから、良くは分からないけど、選挙に出馬するにはたくさんお金がかかるらしい。当選すればそのお金は生きるけど、落選したら取り戻す事はできないらしい。そもそもお金がたかさんないと立候補できないのっておかしい。でも、町中に貼られているポスターもみんな自前らしい。お金かかっているなあと思う。お金がかからない選挙ってできないのかなあ。議員さんを減らしてその税金分で誰もが無料で立候補できたらいいのと思う。世の中、機械化が進んでいるのだから、仕事も簡略化できるだろう。例えば、みんな今、携帯を持っていくから、投票も携帯からできるようにして、選挙にかかる費用を節約して、その分、お金のかからない選挙にしようよ。体が不自由で投票所に行きたいけど行けない人だって、それから投票できると思う。

昔、選挙権は、全員になかったって話を親から聞いた事がある。税金をたくさん納めている人だけという時代もあったそうだ。その後、男の人だけ選挙権があり、女の人にはなかった時代もあったという。僕はへーえと驚いた。まさか、そんな時代があったなんて。でも、今は皆選挙権がある。二十歳になれば誰でも投票できた。僕の時十八歳でできる。やっとなんて選挙権だ。大事に有効に使いたい。ちゃんと考えて、立候補者の話を聞いて僕は投票したい。そして、誰でも（お金がない人も）立候補できるようになってほしい。きつと、もつとうまい方法があると思う。今度の横浜市長選挙の日は、たまプラーザのお祭りの日だ。お祭りにだけ行かないで、行く前に必ず選挙に行つて投票してねって、大人の人に僕は言いたい。選挙権がない時代もあったのだからって。

〈講評〉

全体的に素直な感覚で選挙をとらえ、文章も肩ひじ張らない言葉で表現しているの、思っていることがそのまま伝わってくるような作品です。素朴な疑問やお金という身近な話題からの視点で、親しみを持ちながら読むことができるところはとても良いと思いました、具体的なアイデアを示しながら、疑問の解決や望ましい方向に向かえる意見を述べていけるようにすると、もっと強く訴えられる作品になったと思います。

四年後に「選挙権」を持つ未来

あざみ野中学校 二年 鶴岡 友梨

二〇一六年、十八歳からでも選挙に参加できる、改正公職選挙法が施行されました。とは言っても、このニュースを聞いた時、私は

「まだまだ先の話で私には関係ないな。」

と思い、特に深く考えることもしませんでした。しかし、社会科の授業や学校での生徒会選挙を行い、徐々に選挙に対する考え方を改めなくては、と感じていくようになりました。

そのきっかけとなった一つは、社会科の授業での話でした。先生が、

「十八歳まで、あと四年しかないんだよ。」

とおっしゃっていたのを聞いて、選挙が身近なものに感じました。あと四年で私も選挙権を持ち、政治に関わるようになるなんて、全然考えたこともなく、驚きが大きかったです。その後、テレビや新聞で政治のニュースを見ると、

「あと四年で参加するんだな。」

と思うことが多くなりました。

でも、選挙や政治のことは全然知らず、このままで大丈夫なのかな、と不安に思いました。調べると、横浜市の選挙管理委員会のホームページというものがあり、子供向けに書かれたページもありました。こういったページを読んだり、新聞・ニュースを見て、自分の考えを持つていくことができれば大丈夫そう、と思いました。

その後、学校で生徒会選挙が行われ、更に選挙について考えるようになりました。この人なら大丈夫、学校を良くして欲しかった、と自分で考え投票しました。私にとって初めての選挙で、一票の重みを感じました。

ただ一つ疑問に思ったのは、

「学校の生徒会選挙では全員投票したけれど、実際の選挙での投票率はどのなのだろう」ということです。

私にとって身近な、横浜市長選挙の投票率について調べると、驚くような結果でした。一九九八年から、二〇一三年までの投票率は低く、半分にも満たないぐらいでした。ただ、国政選挙と同日開催で行われた二〇〇九年だけは七十%超えでした、私が投票率が低い原因として考えるのは、

「選挙や自分の持っている一票への関心が低い、又、忙しくて投票に行けない人が多い」ということです。

そして自分にできることはなんだろう、と思い、私は今年、選挙管理委員会に入りました。中学・高校の時から自分の持つ一票の重みを考え、選挙への意識を高めることが大切だと考えたからです。九月・十月から生徒会選挙も行われるので、選挙管理委員会として呼び掛け、選挙について関心を持つてもらえるよう取り組みたいと思います。中学・高校の時から選挙への意識を高く持つことで、投票権を持ったときに、忙しくても投票に行こう、と思えるようになるのではないのでしょうか。多くの人がそういった意識を持つことで投票率や日本の未来が変わっていくけば、良い未来につながると思えます。

#### 〈講評〉

「十八歳以上に選挙権がある。」という遠く感じて、「あと四年で選挙権を持つ。」と言われると急に身近に感じられるんですね。社会科の授業での先生の一言をきっかけとして選挙に関心を持ち、今の自分にできることを考えて、選挙管理委員に立候補するという行動にまでつながられたことがとても立派です。あと四年間でその興味関心をじっくりと育てていきましょう。

## 投票する重要性

山内中学校 三年 中嶋 彩花

昨年より日本の選挙権は十八歳に引き下げられた。これにより有権者が約二百四十万人も増えたのだ。十八歳ということは早くて高校三年生から選挙に参加できる。中学校三年生の私たちもそろそろ政治への関心をもつ必要がある。今回は、今後私たちが考えていかなければならない問題の一つである投票率の低さについて考えたいと思う。

二〇一七年の七月三十日は横浜市長選挙だったが、その際の投票率は約三十三%だった。そして二〇一六年の参議院選挙の投票率は約五十五%だった。では、日本と同じ先進工業国であるアメリカやイギリスはどうだろうか。アメリカの二〇一七年の大統領選挙は四十九%で、イギリスのEU離脱を決めるかどうかの総選挙では七十二%だった。それぞれの結果から、日本の投票率は非常に低いということが分かる。なぜこんなにも低いのだろうか。

世代別で見たときに二十代が最も低いとされている。その主な理由は三つあるとされている。一つ目は、政治への実感がわかないということ。自分の生活と政治がどのように関わっているのかを理解していない人が多いといえる。例えば、消費税はどの税金や教育制度、暮らしやすい環境のための取り組みなど。政治家が意見を出して世の中をよくしようとしてくれている。このことを今の私たちは忘れてはならない。二つ目は、予定があるといった理由を使うなどして選挙と自分の都合の優先順位がつけられない人がいるということ。今では、予定があわなければ期日前投票をするということが出来る。どちらも大事ならそうすべきである。三つ目は、自分一人が投票に行っても行かなくても何も変わらないと思う人がいること。人任せの無責任な行動はいけないことであり、その一人の一票があるからこそ、その票が周りと重なって大きな数になる。

このように、取り上げた三つの理由は、今の私たちなら改善できるような内容である。私も調べてみて、政治について学ぶことがどうやって今後いきてくるのがよく分かった。国民一人一人が選挙への関心を全く持たなかったらこの国はどうなっていくのだろうか。そんな未来のみえない人生を歩むのは自分自身嫌なので国民の一人として今やっておきべき政治への関心をもつことを徹底しておきたい。

## 〈講評〉

十八歳に引き下げられた選挙権に注目し、三年後には自分が有権者となることを意識して、投票率の面から政治への関心の必要性について考えられました。日本の選挙の投票率について外国と比較しながら現状を説明し、二十代が低い原因を中学生らしい視点から三点に整理してわかりやすく述べている点が良かったと思います。次の時代を背負っていく世代として選挙に積極的に臨む姿勢を広めていってください。

## 選挙への関心

山内中学校 三年 築瀬 賢

僕の父は選挙にうるさい。僕の家族は五人家族だが、その中で選挙権がないのは唯一僕だけだ。少し前までは、二十歳以上だった選挙権が十八歳以上に変更されたため、現在二十二歳の姉に加え、十九歳の姉にも選挙権が与えられて有権者になったからだ。

選挙の日は朝から父がそわそわする。「今日は選挙だからね。選挙権を放棄するのは絶対やっつてはいけないからね。」これが父の口癖だ。先日の横浜市長選挙の日も、僕以外の家族は、それぞれに選挙に出かけて行った。

最近は行けていないが、小学生まではよく一緒について行ったものだ。そこは誰も騒ぐことなく、一人一人が選んだ名前をただ書いて帰る、といった神聖な場所に思えた。

僕にはまだ権利がないから、父がなぜそんなに選挙を大切に思うのか、ということとは残念ながらよく分からない。そこで、今の若者達の中で一体どのくらいの割合の人が選挙に関心を持って投票しているのか調べてみた。総務省発表のデータによると、衆議院議員総選挙における年代別投票率の推移について、二十代は現在全年代の中で一番少なく、なんと約三十三%しかなかった。五十年前の昭和四十二年では約六十七%となっていたので、投票率は半分になってしまっていることが分かった。今回調べてみて、僕は正直、大変驚かされた。投票率が低いということは予想していたけれど、まさかここまで低いとは思っていなかった。

僕は、小学校三年生になる春に、川崎市から今の横浜市に引っ越してきたが、その前も、父の仕事の関係で宮城県や兵庫県に小さい頃に暮らしていた。それぞれの土地にはそれぞれの魅力があり大好きな街だ。だが、今考えてみると、問題点もいろいろとあったのである。川崎市は、緑豊かな街だったが、土砂災害の対象区域となっていて大雨の時には注意が必要だった。兵庫県も、近くの公園にホームレスの人達がいた。これらのことで、その土地それぞれに住む上で良い点と悪い点があることが分かった。そして、その自分達が住んでいる街をもっと住みやすい街にしていこうには、やはり自分が良いと思うリーダーを選ぶ必要があると思う。若い世代の人達にこそ、もつと自分の街に興味を持ち、もつともつと多くの人達に選挙に積極的に参加してほしいと思う。僕自身は、今十五歳だ。選挙権獲得まであと三年間もの時間がある。その間に何か社会の為にできることはないか。それを見つけられれば良いと思う。

## 〈講評〉

ご家族の中で唯一選挙権を持たない、また、様々な地域に居住した経験がある筆者の視点から、選挙に関心を持つことの重要性が述べられています。ご家族の「選挙権は放棄してはいけない」との言葉から選挙に行くことは当然だと思っていたものの、現実には投票率が低いことが分かり驚いてしまったりなど、文字通り、筆者が「選挙への関心」を抱いたからこそ感じられた思いが、文章の端々から伝わってきました。その思いを、まずはこの三年間、そして、その先もずっと持ち続けて欲しいと切に願います。



～ いただいた提言のかずかず、これからの選挙啓発に生かします ～

## 選挙啓発・作文コンクールへの応募 ありがとうございます

このたび、次の世代を担う中学生を対象に、選挙の啓発をねらった作文コンクールを開催しました。当該の中学生はもとより、その保護者や一般社会人への投票意識の高まりを願ったのです。

残念なことです。各種の選挙・投票は生活に結びつくとはいえ、なかなか投票率が上がらないという実態があります。平成29年10月22日に執行された第48回衆議院議員総選挙の青葉区の投票率を見ても54.78パーセントとその低調さがうかがえます。

このような現状を少しでも改善し、選挙への関心を高めていただこうと選挙権取得前の中学生の皆さんに働きかけを考えたのです。

対象となる中学生へは夏休み直前のコンクールへの依頼となりましたが、どの中学校も校長先生をはじめ教職員の方々、そして生徒の皆さんにご協力をいただくことができました。初めての開催にもかかわらず、応募総数216もの作品を区明るい選挙推進協議会へお寄せくださいました。厚く御礼を申し上げます。

通例の作文コンクールとは異なって選挙の啓発という大きなテーマでしたが、応募の作品ひとつひとつを読ませていただくと選挙権取得を前にした若い方々の「選挙」への熱い思いが伝わってきます。投票への積極的な提言やアイデアの数々。このままコンクール作品として読ませていただくのではもったいない。これからの各種選挙への「若者」の発言として活用させていただきます。こうと考えています。

コンクールへ応募くださった中学生の皆様、学校の先生方、保護者の皆様、ご協力をありがとうございました。

青葉区明るい選挙推進協議会

会長 柏村 茂



## ■作品の選考・講評■

横浜市立市ヶ尾中学校教諭	山田 繁雄
横浜市立奈良中学校教諭	白山 裕子
横浜市立山内中学校教諭	慶野 好治

横浜市青葉区明るい選挙推進協議会会長	柏村 茂
横浜市青葉区選挙管理委員会委員	邊見 眞智子
横浜市青葉区長	小池 恭一



第1回  
青葉区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集  
平成29年12月発行

発行  
青葉区明るい選挙推進協議会／青葉区選挙管理委員会／青葉区役所  
〒225-0024  
横浜市青葉区市ヶ尾町31番地4  
TEL 045-978-2205~7  
FAX 045-978-2410

☆入賞作品は、青葉区明るい選挙推進協議会のホームページでも公開しています。

青葉区明るい選挙推進協議会

検索

